新見公立短期大学紀要　第25巻
pp. 171－177, 2004

研究ノート

認知症高齢者のコミュニケーション量と感情の分析

松永　美輝恵・井関　智美

介護福祉学

An Analysis of Communication Quantity and Feelings of the Elderly with Dementia

Mikie MATSUNAGA　Satomi ISEKI

(2004年11月10日受理)

高齢者の尊厳を支えるケアを求めて認知症高齢者（認知症者）の８時間中のコミュニケーション量と感情の状況，言語コミュニケーション中の感情の状況等をコミュニケーション対象別にタイムスタディ法で調べその結果を検討した。その結果，認知症者はコミュニケーションなしの時間が7割余と多く，感情も不明が8割近くを占めて多かった。しかし認知症者と他の利用者，家族，介護者のそれぞれの間のコミュニケーション中の感情を比較すると，全ての対象者との言語コミュニケーション中の認知症者の感情は快感情が増加しており，特に家族との間で，快感情が最も増加していた。家族のコミュニケーションの意義が大きく，認知症者の介護では家族の機能の重要性が明らかになった。また，認知症者のコミュニケーション量を増やす関わりが認知症者の生活の質の向上につながるとみなされた。

はじめに

高齢者介護研究会の報告書「2015年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～」が2003年に発表され[1]，介護に関わる多くの人々が高齢者に対する地域生活の支援やユニットケアの重要性について，関心を持つようになってきた。ユニットケアを実践する施設は，特別養護老人ホームを中心に急増していると報告書に述べられている[2]。

ユニットケアは“寄り添うケア”と呼ばれ[3]，認知症高齢者（以下認知症者とする）と介護者や他の利用者とのコミュニケーション量の多い関わりが行われている。また，施設内に家族の居場所ができ滞在時間が増えている。このように，従来の集団処遇型ケアに比べ，認知症者に対する関わりが密になっていると多くの者が述べている[3) 4) 5)]。

一方，集団処遇型ケアを行っている施設も多く存在する。これらの施設では，利用者とのコミュニケーションや関わり不足に悩む介護者が多い。また，認知症者と他の利用者が互いの存在を意識しないような状況や，すぐ隣に居ながら言葉を交わさない状況が多く見られたり，家族が面会のために来所しても長時間滞在できなかったり，場合によっては言葉もかけず帰るというような状況がよく見られる。このような時の認知症者は，無表情であったり，寂しそうな表情であったりするため問題であると感じられた。これらの問題を解決し認知症者が満足の得られるような生活を提供する事は，今日の施設ケアの課題といえよう。

Ⅰ　研究の目的

認知症者に対するコミュニケーションの増加による生活の質の向上を目指して，集団処遇型ケアを実施する入所施設の認知症者を対象に，認知症者のコミュニケーションの状況，非言語コミュニケーションの内容と量，認知症者の感情の状況，認知症者の対象別言語コミュニケーションと感情等の関係等を明らかにする目的で，１分間タイムスタディ法を用いて調査し，その結果を検討した。

Ⅱ　調査方法

１．調査対象

O県の介護老人保健施設（集団処遇型ケアを実施する入所施設）の認知症者（長谷川式簡易知能評価スケール：平均4.6点）で言語コミュニケーションの可能な者19名

２．調査期間

2003年９月１日～４日の間

３．調査方法

１分間タイムスタディ法により認知症者におけるコミュニケーションの状況，言語，非言語コミュニケーションの内容と量，対象別言語コミュニケーションの状況，感情（喜・怒・哀・楽・困・不明）の状況について，１人あたり８時間（９時～17時）の調査を行った。感情は，表情・しぐさ・声のトーン等から喜・怒・哀・楽・困・不明を判断した。

４．分析

８時間中の認知症者の言語コミュニケーションとコミュニケーション対象別における認知症者の感情の関係を分析した。統計処理はSPSSで行い，有意差検定は認知症者１人あたりの平均時間をｔ検定で行った。

５．倫理的配慮

調査結果については，すべて統計的処理を行ない個人の名前が公表されないことを事前に施設や個人に説明し，了解を得た後に調査をした。また論文作成時にこれらの事を厳守して行った。

Ⅲ　結果

１．コミュニケーションの状況（図１）

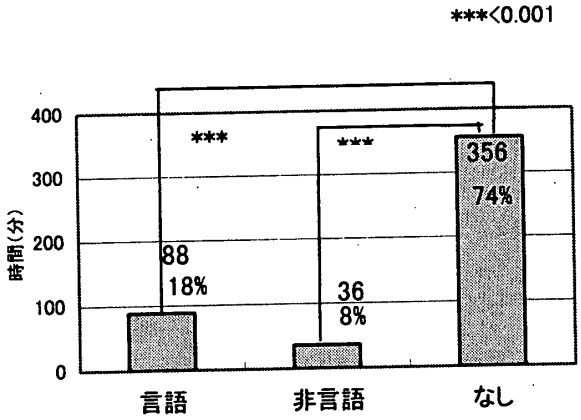

図１　認知症者のコミュニケーションの状況

認知症者はコミュニケーションをどのような内容でどの程度とっているかを知るために，言語コミュニケーション，非言語コミュニケーション，コミュニケーションなしの３項目で調べた。８時間中の１人あたりの平均時間でみるとコミュニケーションなしが最も多く356分（5時間56分）で74%，次いで，言語コミュニケーションが88分（１時間28分）で18%，非言語コミュニケーションが36分で8%であった。認知症者はコミュニケーションなしの時間が日中の８時間（９時―１8時）では有意に多くなっていた。

２．言語（言葉）コミュニケーションの状況（図２）

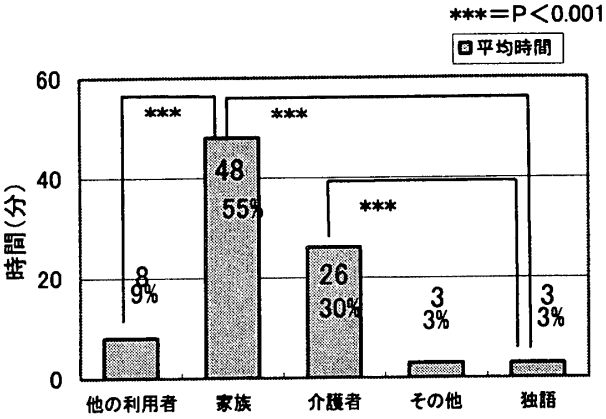

図２　認知症者の言語コミュニケーションの状況

認知症者が誰とどの程度言語コミュニケーションをとっているかを知るために，「他の利用者」「家族」「介護者」「その他（環境等）」「独語（独り言の意）」の５項目で調べた。８時間中の１人あたりの平均時間でみると，認知症者の言語コミュニケーション時間は，「家族」が最も多く48分で全体の55%，次いで「介護者」は26分で30%，「他の利用者」は8分で９%，「その他」は3分で3%，「独語」は3分で3%を占めていた。

これらの項目を有意差でみると，「家族」と「他の利用者」，「家族」と「独語」，「介護者」と「独語」に有意の差が認められた（$p<0.001$）。「家族」と「介護者」，「家族」と「その他」に有意の差を認めた（$p<0.01$）。また，「家族」と「介護者」，「他の利用者」と「その他」にも有意の差が認められた（$p<0.05$）。家族に比べ，介護者は約半分の時間の言語コミュニケーションに留まっていた。

３．非言語コミュニケーションの状況（図３）

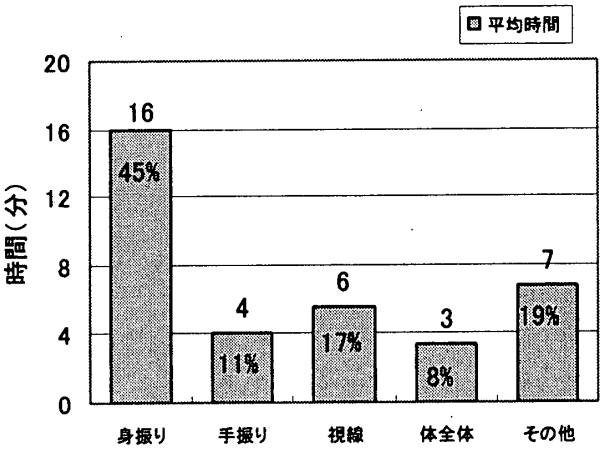

図３　認知症者の非言語コミュニケーションの状況

認知症者がどんな非言語コミュニケーションを用いてどの程度とっているかを知るために，「身振り」「手振り」「視線」「体全体」「その他」について調べた。「身振り」は，うなずく等首を動かすことにより相手に意思を伝える動作とした。「手振り」は，腕を含む手を振る，払いのける動作とした。「視線」は，人やものに意図的に視線を送ることとした。「体全体」は，体をゆする，体全体でおじぎする等体全体を使う動作とした。「その他」は，観察者から見て，非言語コミュニケーションが複数あり判断しにくいもの，または認知症者が他者に対して何かしら非言語的に伝えようとしていることは感じられるが，４項目では判断しにくいものとした。８時間中の平均では，最も時間の多いものが「身振り」が16分で全非言語コミュニケーション時間中の45%，次に「その他」が７分で19%，「視線」が6分で17%，「手振り」が４分で11%，「体全体」が３分で8%を占めていた。「身振り」と「その他」の間に有意の差が認められた。非言語コミュニケーションの中で認知症者は身振りを多く用いコミュニケーションをとっていた（$p<0.05$）。

４．認知症者の感情の状況（図４）

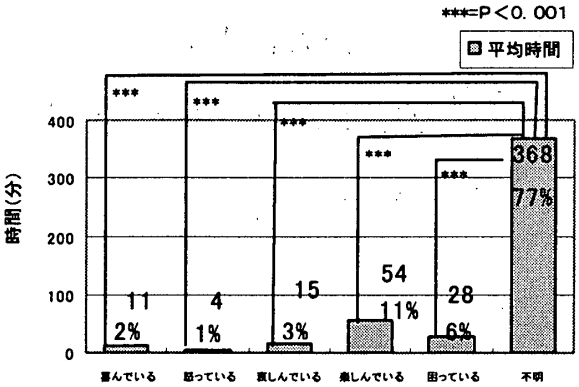

図４　認知症者の感情表出時間

認知症者がどんな感情をどの程度表しているのかを知るために「喜んでいる」「怒っている」「哀しんでいる」「楽しんでいる」の喜怒哀楽の他に認知症者に多いとされる「困っている」を加え，観察者では判断しかねる状況や睡眠状態にある場合は「不明」とし，調べた。８時間中の一人あたりの平均時間，「不明」が最も多く368分（６時間８分）で全体の77%，次いで「楽しんでいる」は54分で11%，「困っている」は28分で６%，「哀しんでいる」は15分で３%，「喜んでいる」は11分で２%，「怒っている」は４分で１%を占めていた。これらの項目を有意差でみると，「不明」と他5項目のそれぞれの間に有意に差が認められ（$p<0.001$），「怒っている」と「楽しんでいる」，「怒っている」と「困っている」の間で（$p<0.001$），「喜んでいる」と「困っている」，「喜んでいる」と「楽しんでいる」の間で（$p<0.01$），「怒っている」と「哀しんでいる」，「喜んでいる」と「怒っている」の間で（$p<0.05$）の

有意差が認められた。このように「不明」が他より顕著に多かった。また，「怒っている」が逆に少なかった。

5．他の利用者との言語コミュニケーション時の認知症者の感情の状況（図5）

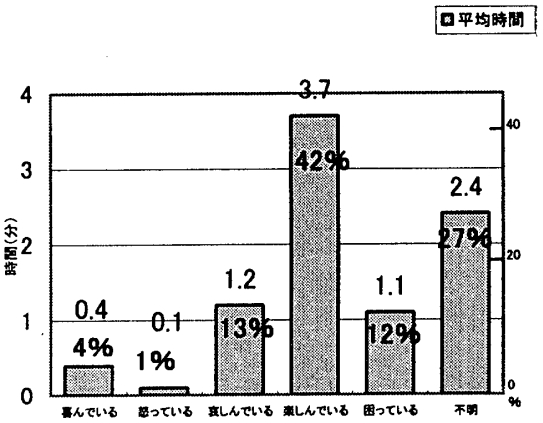

図5　他の利用者との言語コミュニケーション時の感情の状況

他の利用者との言語コミュニケーションと認知症者の感情の関係を知るために，他の利用者と言語コミュニケーションをとっている際の認知症者の感情の状況を検討した。その結果，8時間中の一人当たりの平均時間は，「楽しんでいる」が最も多く3.7分で全感情表出時間中の42%を占め，次いで「不明」は2.4分で27%，「哀しんでいる」は1.2分で13%，「困っている」は1.1分で12%，「喜んでいる」は0.4分で4%，「怒っている」は0.1分で1%を占めていた。これらと，認知症者の全感情表出時間の項目の率を順位で比較すると，「不明」と「楽しんでいる」の二者が入れ替わっており，楽しんでいる時間が増加していた。また，「哀しんでいる」と「困っている」の二者も入れ替わっていた。他の利用者と認知症者との言語コミュニケーションでは「楽しんでいる」と「困っている」の感情の占める割合が増加していた。

6．家族との言語コミュニケーション時の感情の状況（図6）

認知症者と家族の言語コミュニケーションと認知症者の感情の関係を知るために，家族と言語コミュニケーションをとっている時の認知症者の感情の状況を検討した。その結果，8時間中の一人

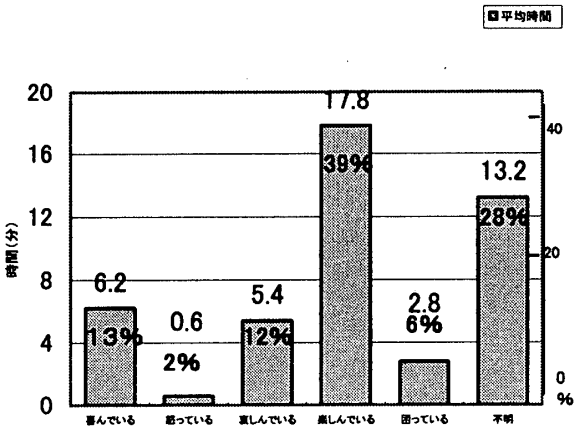

図6　家族との言語コミュニケーション時の感情の状況

あたりの平均時間は，「楽しんでいる」が最も多く17.8分で家族との言語コミュニケーション時の感情表出時間中の39%を占め，次いで「不明」は13.2分で28%，「喜んでいる」は6.2分で13%，「哀しんでいる」は5.4分で12%，「困っている」は2.8分で6%，「怒っている」は0.6分で2%を占めていた。これらと認知症者の全感情表出時間の項目の率を順位で比較すると「不明」と「楽しんでいる」の二者が入れ替わり，「困っている」と「喜んでいる」の二者も入れ替わっていた。このことから，家族が関わっている時は「楽しんでいる」や「喜んでいる」という快の感情が増加していることが明らかになった。

7．介護者との言語コミュニケーション時の感情の状況（図7）

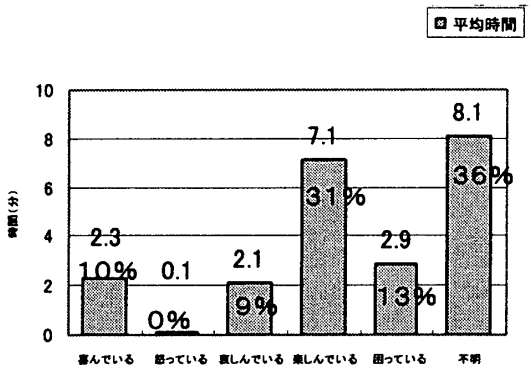

図7　介護者との言語コミュニケーション時の感情の状況

認知症者と介護者の言語コミュニケーションと認知症者の感情の関係を知るために，介護者と言語コミュニケーションをとっている時の認知症者の感情の状況を検討した。その結果，８時間中の一人当たりの平均時間は「不明」が最も多く8.1分で介護者との言語コミュニケーション時の感情表出時間中の36%を占め，次いで「楽しんでいる」は7.1分で31%，「困っている」は2.9分で13%，「喜んでいる」は2.3分で10%，「哀しんでいる」は2.1分で9%，「怒っている」は0.1分で0.4%を占めていた。これらと認知症者の全感情表出時間の項目の率を順位で比較すると「喜んでいる」と「哀しんでいる」の二者が入れ替わっていた。このことから，介護者が関わっている時は，「喜んでいる」という快の感情が「哀しんでいる」という不快な感情より増加していることが明らかになった。

８．他の利用者と家族・介護者との言語コミュニケーション時の感情の比較（図８）

認知症者と他の利用者，家族，介護者それぞれの間の言語コミュニケーション中の認知症者の感情の状況を知るために「他の利用者との言語コミュニケーション時の感情の状況」，「家族との言語コミュニケーション時の感情の状況」，「介護者との言語コミュニケーション時の感情の状況」の三者の比較を行った。対象にかかわらず「楽しんでいる」が最も多く，次いで「不明」であった。有意差をみると，「怒っている」の家族と介護者の間，「楽しんでいる」の家族と介護者の間，「困っている」の家族と介護者の間に有意差が認められた（p＜0.001）。また，「喜んでいる」の他の利用者と家族の間，「怒っている」の他の利用者と介護者の間，「楽しんでいる」の他の利用者と家族の間，「困っている」の他の利用者と家族の間に有意に差が認められ（p＜0.01），「喜んでいる」の他の利用者と介護者の間にも有意に差が認められた（p 0.05）。これらのことから，家族と他の利用者，介護者を比較した場合，認知症者が家族と言語コミュニケーションをとる時に快感情がより強く現れる傾向にあることが明らかになった。

Ⅳ　考察

１．認知症者のコミュニケーションの状況

認知症者との関わりを深めるためのより良い方策を求めて，認知症者がコミュニケーションをどのような方法でどの程度，誰ととっているかを知るために，これらの時間を調べ，結果を述べてきた。コミュニケーションの方法に関しては，コミュニケーション「なし」の時間が5時間36分（356分）と８時間中の74%を占めて多く，「言語コミュニケーション」は18%に留まっていた。「なし」が多く認知症者は他者との精神的な交流時間が少なくなっていた。認知症者は周囲や他者への関心をなくすると言われており[6]，他者への関心の低下が影響していると思われる。

非言語コミュニケーションの内容別所要時間に関しては，「身振り」が16分で全非言語コミュニケーション中45%を占め最も多かった。認知症者は非

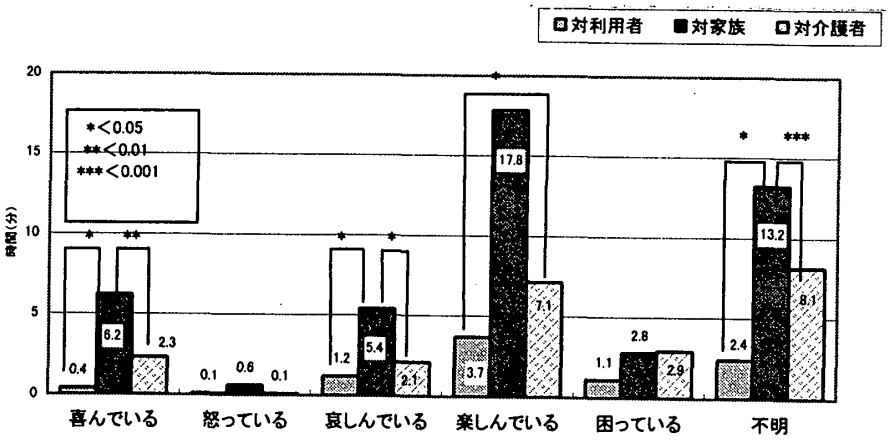

図８　認知症者と３者の言語コミュニケーション時の感情の状況の比較

言語コミュニケーションでは身振りによって意思を伝達しようとしていることがうかがえた。このことから介護する際に，認知症者の精神的内面を知ることや意思の確認（意思決定）を行なう場合は，身振りで感情や意思の伝達の確認をすることが有用であると考えられる。

2．認知症者の感情表出

認知症者の感情表出の所要時間については，喜怒哀楽困に当てはまらない感情の「不明」の時間が8時間中の6時間8分（368分）で全感情表出時間中の78%と約8割を占めており，「楽しんでいる」11%，「困っている」6%がより顕著に多かった。「不明」の時間が多いことは，認知症者は疾患的に感情表出が乏しくなる[7]ことが影響していると考えられる。上記のコミュニケーションなしの者が多いこと，感情の不明の時間が多いことを合わせてみると他者との交流が少なく無表情な認知症者が推測される。これらの認知症者に対して生きいきとした表情が現れるようにコミュニケーションの量を増加させることが重要である。また「楽しんでいる」は，感情表出全体の約1割を占めている。これの約半分の時間は，他の利用者，家族，介護者が関わった時の感情表出の時間である。残りの約半分の時間の多くは，認知症者を対象とした少人数制のレクリエーションや集団レクリエーションのどちらかに参加したことで，「楽しんでいる」という感情表出がなされたのではないかと推測できる。「楽しんでいる」は，感情表出の約1割であったが，感情表出が乏しくなり，ストレスを多く抱えている認知症者にとっては，少ない量とはいえないと考えられる。しかし，感情の「不明」が多くの時間数を占めているので，これを「楽しんでいる」に転換し増加させるためにも他者との関わりを増やし，コミュニケーション量を増加させることは重要である。

3．認知症者との言語コミュニケーションの対象別（他の利用者，家族，介護者）所要時間及び感情表出時間の比較

認知症者との言語コミュニケーションの対象別（他の利用者，家族，介護者）の所要時間を比較すると，家族が48.5分で全言語コミュニケーション所要時間中55%を占めており介護者の30%弱を上回っていた。言語コミュニケーション時間が家族で多いことは，数名の認知症者の家族が長時間滞在し，認知症者だけでなく，他の利用者に対しても積極的に言語コミュニケーションをとっていたことが影響していると考えられる。

全ての対象者（他の利用者，家族，介護者）との言語コミュニケーション中の認知症者の感情は快感情が増加しており，特に家族との間で，快感情が最も増加していた。認知症者と家族との言語コミュニケーション時間が多く，また快感情の表出時間も多くなっており，家族のコミュニケーションでの関わりが重要であることが明らかとなった。

中島らは，家族は，痴呆者の不確かなコミュニケーション上の断面をその人の生活史や性向と結び合わせて推論する“ほどよい読解力”を学習する場（家庭）の人々の集まりである。痴呆者は，この読解力に依存して，痴呆を病む自己を保つことができるようになるという。介護者はこのような家族の機能の維持や向上のために，家族に対して情緒的支援の提供や家族関係の調整・強化，セルフケアの強化等を行わなくてはならない。と述べている[8]。このように認知症者に利用者の快感情を増やし楽しく安らかな生活を提供するために，介護者は家族と認知症者のよい関係の維持や修復が重要となってくる。実際には，家族との関係が疎遠でこのような関係作りが困難なこともある。このような際は，家族の役割を介護者や他の利用者が担うことで，認知症者にとってのよい環境を整えていく必要がある。

ユニットケアでは少人数の利用者が一緒に生活し擬似的な家族的関係をつくり，介護者も家族の一員となり認知症者のケアを行うものである。このように家族の機能が利用者のケアに取り入れられており，今回の調査でも家族との言語コミュニケーションが多いことや，そのことが認知症者の快感情を増やし生活の活性化につながっていることが明らかとなったことは，ユニットケアが目指している家族の機能そのものであるといえる。

介護者は認知症者との言語コミュニケーション中に認知症者の快感情を増加させて，他の対象者より増加量が少なかった。介護者は認知症者の日

常生活行動中に言語コミュニケーションを取っていることが多い。ケアの際に認知症者の意思を聞いたり，コミュニケーションをとりながら行うが，このような時は快感情の表出が減少する事が推測され，介護者で快感情の表出時間が他の対象より少ないものと考えられる。

本研究では，認知症者がコミュニケーションを取っていない時間が多いことや，感情不明な時間が多いことが明らかになった。これらから，認知症者の生活の質の向上のために，コミュニケーションの増加が重要であることが再認識された。

また，認知症者との言語コミュニケーションでは“家族”が認知症者に快感情を多くもたらし良い役割を果しており，家族とのコミュニケーションの意義が大きく，認知症者の介護では家族の機能の重要性が明らかになった。

今回は，認知症者が非言語コミュニケーションを用いた時の認知症者の感情の状況については調査していない。今後，非言語コミュニケーションの効果について明らかにしたい。

謝辞

本研究において，長時間にわたる調査にご協力いただきました介護老人保健施設Sの入所者の方々やスタッフの方々に，心から感謝申し上げます。

引用文献

1）高齢者介護研究会：2015年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～（要約版），ユニットケア白書2003，2003，pp358－379.
2）1）に同じ，p363.
3）田中美代江：しかたがないケアと環境から当たり前のケアと環境へ，ユニットケア白書2003，2003，pp92－99.
4）久野美文：さくら園のユニットケアの実践，ユニットケア白書2003，2003，pp110－114.
5）泉田照雄：ユニットケア導入時の三本柱，ユニットケア白書2003，2003，pp235－238.
6）稲見美和子他：ジェスチャーで相手に意思を伝えることは可能か，痴呆介護2002，Vol.3，No.4，2002，pp36－40.
7）江草安彦監修：新・痴呆高齢者の理解とケア，メディカルレビュー社，東京，2004，pp23－28
8）中島紀恵子他：ケアの担い手，痴呆ケア標準テキスト痴呆ケアの基礎，2004，pp108－111，

主な参考文献

1）益谷眞他：心と行動のサイエンス，北樹出版，東京，2003，pp74－77.
2）小野寺道子：一人の生活を追って変化する介護　逆デイサービスの取り組み，ユニットケア白書，2003，pp68－75.
3）鈴木みな子他：施設側からみた施設環境づくりの取り組みと課題，痴呆高齢者が安心できるケア環境づくり，2003，pp95－102.
4）須藤演子：表情から読み取る，表情の変化を見逃さない，痴呆介護2002，vol3，No.4，2002，pp18－24.
5）板垣幸一他：痴呆高齢者へのスキンシップの効果―触って気づく相手の気持ち，痴呆介護2002，vol.3，No.4，2002，pp31－35.

Summary

Recently, there has been a greater demand for emphasis on the dignity of the elderly with dementia when they are cared. Then, the authors have researched on communication quantity and feelings of the elderly, and their feelings during the verbal communication. We have found out that they spent more than seventy percent of the research time without communication. Their feelings were not clear in about eighty percent of the research time. We have also found out that the percent of pleasant feelings increased while they communicated, especially with their family. The importance of the role of the family in caring the elderly with dementia has been clearly shown. Relationship enhancing communication improves the quality of life of the elderly with dementia.